

図書館のお宝大公開展資料

主な展示資料の解説

① 『吉田城本丸二之丸略絵図』1舗 初代豊橋市長大口喜六寄贈 三河吉田城本丸と二の丸を構成する櫓・御殿・石垣などを中心として鳥瞰図風に描いたもので、本丸御殿が描かれていないのは、宝永4（1707）年の地震による倒壊から後の様子を描いていることが分かる。このような構図は、現存する吉田城図のなかでも珍しく貴重なものである。	② 『吉田宿東海道筋町別地図』12舗 初代豊橋市長大口喜六寄贈 東海道吉田宿を構成する12町の、町別地図である。それぞれ戸別に名前、間口、奥行き、伝馬役等の記載がある。宿場の中心は札木町で、問屋場・本陣・脇本陣などの主要施設が集中していた。数少ない吉田宿を知る史料として、歴史的に価値の高いものである。
③ 『解体新書』5冊 安永3(1774)年刊 羽田八幡宮文庫 江戸時代出版された日本最初の西洋医学の翻訳書で、杉田玄白と前野良沢を中心とする蘭学者が、ドイツ人クルムスの書いた解剖書のオランダ語訳『ターヘル・アナトミア』の正確さに感銘を受け翻訳したものである。教科書でもなじみのあるもので、西洋医学導入の契機ともなった記念碑的な資料である。	④ 『機巧図彙』3冊 寛政8(1796)年刊 羽田八幡宮文庫 江戸時代に出版された唯一の機械玩具の解説書で、和時計の機構や茶運人形、魚釣人形など9種類に及ぶからくりの構造が図解されている。特に、実用性を合わせもった茶運人形は、富裕な人々の玩具として人気を集めた。江戸時代の科学的資料として、全国的にみても稀少なものである。
⑤ 『活刷那波列翁傳初編』4冊 安政4(1857)年刊 小関三英訳 田原松岡氏清風館活字板 フランスの英雄ナポレオンの伝記で、オランダのリンデンが著したものを、蘭学者小関三英が訳したものである。出版人の田原松岡氏は松岡次郎(与権)のことで、田原藩校成章館教授などを歴任、田原藩江戸家老となった人物である。この書はナポレオンの伝記として、日本で2番目に出版された。	⑥ 『芥子図』1幅 渡辺如山筆 豊橋文化協会寄贈 渡辺如山(1816～1837)は、三河田原藩の重臣渡辺崋山の末弟で画を兄崋山に学び、山水花鳥画をよくした。幼名を五郎といい、崋山が最も愛したと伝えられている。将来を期待されたが22歳で早世したため、残された作品は少ない。
⑦ 『世界各国旅行証明簿』1冊 中村直吉著 中村直吉(1865～1932)は、豊橋市鍛冶町で帽子屋を営む一方、政治的活動をしていたが、明治34(1901)年世界一周無銭旅行の旅に出た。長崎から朝鮮、中国、東南アジア等を経てヨーロッパに入り、イベリア半島を経由して南アメリカへ向かうコースをとった。旅行中、大使館員等に証明のサインをもらったのがこの証明簿である。	⑧ 『THE CENTURY DICTIONARY CYCLOPEDIA AND ATLAS』10冊 通称「センチュリーディクショナリー」、アメリカで版を重ねた辞書である。鈴木悦(1886～1933)が使用していたと伝えられ、後に遺族が寄贈したものである。悦は豊橋市老津町出身、カナダに渡って日本人労組を結成、「日刊民衆」社を設立したジャーナリストである。当時、有名となった田村俊子との恋愛は、瀬戸内晴美(寂聴)著の『田村俊子』にくわしく記述されている。

9 丸山薫自筆詩稿「Pホテル十階酒場」 1枚

丸山薫(1899～1974)は、大分市で生まれた。幼くして父が病気で死去したため、母竹子の実家のある豊橋に住んだ。東京高等商船学校、第三高等学校、東京帝国大学を経て昭和7(1932)年第一詩集『帆・ランプ・鷗』を刊行した。その後、堀辰雄、三好達治とともに詩誌「四季」を発刊した。この詩は、第15詩集「蟻のいる顔」(昭和48年)に所収のものである。

**11 『詩集智恵子抄』 1冊
昭和16(1941)年 初版本 高村光太郎著 岩瀬正雄現代詩文庫**

高村光太郎(1883～1956)は東京都出身の詩人で、彫刻家でもあった。豊橋市の詩人岩瀬正雄は、詩を通して高村光太郎と親交があり、「これは僕の友人の豊橋からきた岩瀬君です」と客人に紹介されたことを、著書『一匹の黄金虫』で、感激的に回想している。

**13 『ZEEMANS—WOORDEBOEK(WOORDENBOEK)』1冊
中島三郎助旧蔵**

オランダ語の「船員用辞書」である。幕末の「御軍艦操練所」の蔵書印のほか、他の資料には「中島氏図書記」の印がある。これらは、浦賀奉行所幕臣中島三郎助(1820～1869)が手元に置いて使用していたものを、函館戦争で戦死する前に甥の吉田藩士穂積清軒・寅九郎兄弟が受け継ぎ、清軒の死後寅九郎が寄贈したものである。

15 「参陽新報」「新朝報」(複製)

「参陽新報」は明治32(1899)年2月11日、「新朝報」は明治35(1902)年9月28日に豊橋で発行された日刊紙である。両紙は、豊橋の政界や財界が同志派と実業派に分かれて対抗するようになると、参陽新報は同志派、新朝報は実業派の主張をそれぞれ代弁する新聞として戦前期まで続いた。

**10 小栗風葉自筆俳句短冊 1枚
「宮に似たうしろ姿や春の月」**

小栗風葉(1875～1926)は、愛知県半田市出身で、明治文壇の雄尾崎紅葉の門下となり、次々と小説を発表した。また、豊橋市の素封家加藤家の婿養子となり、後半生を豊橋で過ごした。特に、師紅葉の死で未完となっていた『金色夜叉』の続編を『金色夜叉終編』として完成させたことは有名である。句中の「宮」は、『金色夜叉』のヒロイン「鳴沢宮」のことである。

**12 「詩人I君の像」(デッサン) 1枚
高須光治画 岩瀬正雄現代詩文庫**

岩瀬正雄は、豊橋市出身の洋画家高須光治(1897～1990)と雑誌「文化」の編集を通じて交流があった。この絵は、30歳頃の岩瀬正雄を高須が描いたもので、同名の本画があることから、これはそのデッサンであると思われる。岩瀬は、特にこの絵を気に入っていたことを著書『一匹の黄金虫』の中で述べている。

14 『SERINDIA』 4冊 1980年刊 スタイン 司文庫

スタイン(1862～1943)はイギリスの考古学者で、探検家でもあった。ペルシア、中央アジア等の考古学的探検事業に従事し、幾多の重要な発見をした。この書は、シルクロードの舞台となった中央アジアおよび中国西北部探検の詳細なレポートで、往時の面影を今日に伝える貴重な資料である。

発行 豊橋市中央図書館 2011.10